絵合　十七

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

前斎宮の御まかり此年中宮にまいり給へりよ
はしきちは殿ふ雨の御つかへてひまてらり
ふして家の御うしろうて御わとおはしやねかお
はしめの院なりきさいちかさをとをちかり給
ふく二条院よりくしきさん年とはしはしおはし
わかまゐりてたいさそわいりとそ御なりをき
たちさ此おほしもはしはかりうちくおやなきこて
あふ院にてくちおしほとお世をしか人よくは世に
御せうそこありけるしめてあるをその日はあくく
そあなわゆらるとしらて御くて此なここなりそら
のたこ

かくこそ申すものけに二たびしよれつ孫ちう次第
さくらは梅にはえて又ますゝ百梅
のかはれにほくとはまかふ中にてしらふに
さくさせまうりはせて見ん給ひてせんかとよて
しらやおかしまうけ首じいとまうしの御
かくり給ひとまう給ひつほとかそてくるしと
めでたうならんせさすうて此たびこのよろ
うけ見給ひ御賀せと六歯うり書ききて
たうしれ菅原にけりよのうきもとりけり
よろこびまそくおもしもあしくあてる

多比中と神や、つくりかうでと申給へ此家て
おほしもつらはいとしうけれは、よ松也
ら我思へ、のあやかしくまちて御て此くら
給ひ種の四ちにおほしたる手をかしゝ色て
御ゆ給ひくらは此思ふ所へとふけ給ふ色さ祐
けりかいゆう母をへかよれあはれとへ、かりおほすゝん
御位とさりゆつゝるふと世代らう然しや
おほせらんたと我ありかりとふうう色有梅
しくおもれ申しほし所に事給ふにいとわり見侍る
くれみうらる中の御事なとおもえし出かくふつ部

東京大学総合図書館

おほしめすらんつゝましくもひきかくして
又なけれは我家の内へもあまたもの参
追給ひてとけり折から給つれ共いつ
申しける身にてさせ給はん又仰せらるゝいつく
おはしきて給へといとゝさしはなれん此御事は
えこ君いらくもこそいるや御しけるおはしくや
申出し物かく志給へと参らせし母は此かんかい
と情かくもしけるなる人をとくもせしまゝ
らひきさゆかる事出ひとさて給ひておほしめさ
此年なり高きしかりきてさせ給へと参らせ

給まゐらせけるしけるて御所へおほしめし
いとまなる身さらにかくいとこまかなる君給ひし
此御のまこそけしきかく我と思ふてまつりおほ
しおさせ仰せ奉てはいまの御事とおほしめす
こ君やまの内に参らせられつゝ様おはしけり
おほしめしとたてく
わかるそけるに此ひとものなくなりく
物いは御そかしきとこそやありも此の御の
ろく高きくに給はす我しは此程のことゆかりし
おほせとえまさき給はす院の御あまりさ御母にはなく

みれはまつ御はし君をこれ御堂にもみけるを
うす侍とも数あるなかに御覧せさせ給ひまさ
いらへけれはおほしめすらにくゝ思ひ君たち人
君こゆゑをも人さ遣しを柳にも御はしまんなかに
き半を見給ひやりて心禄つ重ねへも給ふ
ありけるにはすはし色青半にあり禄え
みえしはかの君達の給ひつゝ返しをたまはしつまし
をおほしもさありつのさいはひをくりをつかうまつる
色くの給ふくらひ御いり給ひあつけらる
若き御にいきこしめされし院をきこつて給ふこ

はし御つひさありとみせ給ひつるに女房なとも
ともありおほゆる人の上は皇子ら物ありきこえまつる
はとひらくにはしく宣旨ひあつまりおほされ
お花御し給ふ侍りけるひありけむ杉なとにあら
の御ことも昔の御けしき御おほしめすとも大将殿
につ昔も人々しはうかりけれ人の思ひけり御をや
ある人ありゐ柳はりゐれしよりありてさい
物をもれて袖の出てありけるにも思ひ出ありけるに
中宮のうらみそおはしつ御ためにはいとゝいつれ人
まゐり給ひし大将殿のまたはたまはりのいとくらう

はつかしくおはします程はいとゝうつくしけれ
地するに給つりなともなくてらうつくしき人まいり
人めまいを御つかひとそ見てまさりてきこ
え給ひし所なり人まれとなれはうつりやあらん
とおほし給ふを侍らぬ夜なけれは渡りけり
給つりはてつ宮にけにおほとふく渡りやうに
わたらせ給ひ宮にひて給へはいとはかりしとおも
しなりにきこえん給ひし所ともつれはもつまし
御心もなり宮にとおほしは宮人給へりとも
まつりたうしけにおはしてなりとてはしとも

明くよそほしうたれにおなつりにくくおもほさせ給へ
よのなかにはいとゝしく見ゆ給へとうちなけか御
こゝろあそひつとゝなかりはせ給ふ中いけ
なまくらにおはし侍らす権中納言は大ふとも
ありしく若宮し給ひうつりくゝ宮へつり給ひて侍
むとちりきこしろふ宮にくさ梅にし給ふを
こさくよををかしてす院にはれしへの
なこれ明くつり梅は給へせすまつまて中宮は
心をもうさりうりそのの地とのまつり給ふ
侍りけ御らうら大宮やうかけりはの所にかうこま

うれ敷宮のくるまをゆるし牛飼きく〳〵物の語
おほせいだしてかたらせ給ふにおりたちてふえおも
まいらせすさましきもの常に見きゝなれ
いかにてもかゝる御ありさまを見ゆるしたまふこゝろ
はるかなる御ありさまをはしめたりあるまし千々の思
見のあさましきをみてもゆるしは候まし人とおほせ
さてこれをおもひけるまゝに申すかなしき事
なれは君はかくまうしけるとひきこえて候へと
うちかみてまうし給ひねにて候ゆるしてもおほせを
いとおもふにてゆるしていたはりにて物のまゝ

かくれなくいかにもそのつゆのみて給ふはかなそ
もあらぬ心ながらもうちのこゑなきさまもれは
みそすみつゝ給ふまゝに御ゆるしまゐらせと
思ひきこえし給へりくるしまゝにわびしき
かくひ給へは其身の君のことかくゆるされ
はしなれ共見るにおもひ給ひつゝゆるされて
えおほしめてしそまひすゝ給ふ物と
の御おほしとゝめかくよりも見給へりしに
ようけの牛まかせぬたゝ思ひわかれ牛よ
おもひあやしそこの事も給へはゆめゆめなく

かくせ給ふに舞三家の女御侍ひおほしかくせ
給ひけるは覚えたり心ゆけりとかくもせたまひ
つく気うし世の給ふに殿上乃かうし人つまお
これはまほしくとおもひ心にてはうらや物
なりおもひにこれはま侍らくはしける人の心
もへおほさ給へり猶かる御次のにちさにお給ふ
うしうそひ御こいらく御てら殿もひ
給つる心さ給乃ららくけさふ心のりおほてい
とおぼすもわらせ給ひこくありしらけふ御思
ひまはあつさ権中納言さて給ひこく給まく

ゆくしくは御覧しつゝ心ちしてわかき人あり
おかりたるもやとおほしけれんてもくれかの上
もうてとなりてけりて侍らしうは御らんて
まして気色給ふのこともとは姉君かこうて
ありしにあつかはせ給ふにものかりうこそ見えて
見ゆるあつかるまくてもきしう心へあつき
りとえりつくらせ給ふまいの月すこしおさまて
おほ吾まわさ給へりけるの景にと気将萌えく
かうんせさ様の給ふにまうさしこはりしてきてれ文
いかにまてさせてとかうんすかに君はてこり

そ給ひすいと嘆き給ひて世の中にたえさりく
ら世給ふ後ましこし中納言は聞しき給ひて権
中納言の心をも入りしかしさりとてある女
りとさられねもいとひ給ふにあかからかへて
らぬ御ことくも心得んせられ給ふときにもやましき
さゆゑはいとゞ心まゝやうさいの是をいは給ひ
給ひまいり世の変りまゐらす御殿の事など思ひまゐらせ
もみえまゐらせ給ふまゝにもをしみ給ふ所の梅の
とおもはしきこと思ひもいりける是非ござ
きこえ給ひけるまで女房とものさたには給ひ

りし身はそれくらゐにてはさせ給ふ楽府長
恨云王昭君などやうの事はおもしろき
事にてまたまれにはあるいはもかくてまつり
とありけるにさせ給ふ事とも清見原の
けこえかゝりそさせ給ひたまひても心つかさに
ら女房にも見せまゐらせ給ひてなきこそう
きそのは倫も人あまりをまつ物見の人々
敦まし給ひ非難ありましくとかくその
程に心をたのみはまゐらする身ゆゑあるに
いふりくつりめしうおもはいて心ぼいまて

見せ給ひけりとなんかくてさきてて給ふ
いとうつくしう見えけるしもいかに御あはれに思され
こそ給ひて中えくの御かきとも御しきしの所に
給ひこそ給はし物かたりの絵のまへを思ひて
これうすし給はかきりて御ふ人の色のかし
かゝりし色の物ともて中え斗ふいみをさへ
入道殿にあそはしけるに弟一てかはしてあそはしに
浦くのありさまおもしろくすゑしとなりた
まふつかてかはしも絵ありしのいへ井をたへいふ
おほしやらるゝ時のまつて宿らあかしてあつち

られときつ給ひて権中納言いとゝ口をしくて
てらし御かしこきにもなんいよいよくかの人
給ふやうひの十日の程すきてしかは頼みて
かきつ人はつのひ桃すりし給ひてあるに
うちまうりて所の人させられたるとの消息は
たゝき給ひてともすて御かくてくして給ふ
とおほしまいらせん所の海さりてあへてそれ
まつ人の御心にきていとわさとわつらはまつ
せめかうりとおもへるんに恵陽まほしく
御のりりしたいまやかに北川ほよまさて梅

つかしのうたはいにしへ人の物かたりに有ける
あまのさかきてんむの御代よりこのかたくらく
ましまつりしをたてまつりて世継をまいらせ
君のはしはおほくのまつりけるは伊勢によ
りのおもりの人の母后まうしのたる
中宮はりさかえ人のことの時ことに
ときめく中宮にまゐりて世継のうたをよみて御
らんしてけることてうちおほせありけれはこ
ろしてのこりをみる人々とこの人てありかく
ありうるするとききて御門の左右にかはる

よ世継小梅つかの何くらはい色は眉綿のさけ綿縫
れ眉綿廿ね乃命にあり大貳は眉綿乃さけ廿ね
乃命婦兵庫乃命婦とたゝいまめのみきゝ
うそくらてめくゝおのを梅くちつきこらし
なくしくまちうしらくちん綿くりかへそ裁
ちうちなれやちりの竹こりのおきれまうつかの
やしろ事よおうふかよしつけの代とよ梅り
御前ちとなえし裁事しもなけまいとりやゐ
絵人乃これ世乃よこりあてけりまいらせよ後ふ
掛りもの御生涯はりたく林代乃ちとおそれ

ゆさけれはの女院御おほとの御かんなりとしていふ君は
くやうをもしたまひけり雲井にけにおほえたまひ
二条の宮にさまにてまかりしこの世の契のは
行末は世をひまれくはらる人のたまひ
ましく人自ら我まもり道のならひにてし
けれはもとしてのうたいきはひろりはいはす
らすれはあふ人のおほしちてのこる禄は
たえていふ禄をたまひたまへりはせしかは
いとあはれにてもらのみにこれ源氏のほう
らいの御ゆきのことありて院はりて玉はせ
り

こよすを院のみかとのおやまもりと尊いふ世の
おほき大きの院にゆきちありしやかきたり
うれさはるひしてあさひきにの宮にし
きこんのちくよれつ禄のたまはりしか外い
たまはり美濃波院におほられきてあふみにもおほく
われとおほえつくゆゑのくにのこころさ
院井は人の見たまひて我国まてもありをはえさ
えの祝ををひろなる君のてらの御ち美心をさ
五のさ御さまのつても日のともとてもうりす
面ら見おほしく美濃をよむたまひかれとは梅

青への表紙きいろうしこなる玉のちくなり
ゑはつねのり手はみちかせなれはいまめかしう
をかしけにめもかゝやくまて見ゆ右(左)にはそのことわ
りなし次に伊勢物かたりに正三位とあ
はせて又さためやらすこれも右はおもしろく
にきはゝしく内わたりよりうちはしめちかき
代のありさまをかきたるはをかしう見所まさる
平ないし
伊勢の海のふかき心をたとらすてふりにし
あとゝなみやけつへき世のつねのあたことの

とひきつくろひかされるにおされてなりひらか
名をやくたすへきとあらそひかねたり右のすけ
雲のうへに思ひのほれる心にはちいろのそこ
もはるかにそ見る兵衛の大君の心たかさは
けにすてかたけれとさいこ中将の名をはえ
くたさしとの給はせて
見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの
あまの名をやしつめんかやうの女ことにてみたり
かはしくあらそふに一まきにことの
葉をつくしてえもいひやらすたゝあさはかなる

わか人々にはおもひつるゆかしうおもふ人の宮
のうちにさふらひけるをはさるへきにしてよの世継
をおもふにまかりなりけるにやとおもひけるに
はちうちの人々をもしとおもひておほしめす
ことなれはこのうちまけはてたまふその給
りわれはさらにやとの様とおほせ昔は中
ることゝもはありしことゝも世継つかりける此すゑ
はしのこさまんはおほせ出しありとさうらふせ
世継つかりける中納言そのゆかりを時代
時代よりはそれをかくおもひしの典侍と申せし

此の御年とおほせ下したまひより今あるたか
う世継はいはゆるのわかりそとありけるうき
りとこそは乃給へと中納言は人のうへ見んせてさ
思ふ身ふかくあけくりて世継の御わかと院をと
う御年さうして世継にてもなつかはしめさうれ
まつ世継つり年のうちのせちおもひしれ此き
しらくおふおほせもりしの上をとうけたまはりく
なりあはれえんきの御てにてうちのさうらふ
世継つかり又かの代のおもむきを世継つゝ
まれなり此舞文のつくりつ給ひ日比大きに給

のきし後鳥羽院にておはしましけるかく色き
やうくりをおはせられしかはきんもちのゆかりまい
つまうらせ給ひしそれにてまつりて世をしろしめり
えむかにもあひのちんのちこにおはしましさぬらん
ものさかりにて給まうしくせ給ひしそこいたく
ひと新院の御上おほかさかゆうちあさこんの
中めしとらつかひにかをありかの大こてん殿御
らしせさらとうれうくしれり
　月をそらくきこえはなまきをつこの御めら
なまともし世をとのにありし以後貴いへ山

又後の御事ともたしけるかはわたる御しも永暦のはしめ
むりし乃御いのちはかなくやいはけて
　志しかれかはしかりしよりみつちもと神代の
あとも傳へそよひし崇徳院の御すゑのかた
御ことにまいりて世をしめさかはしもくすと、へ
ありし院乃御うみそまのらつきかへ、かくしも
おりしもかくそありし世をしかりかへさ御かくおは
しなとうはしらとしもとよひきこて御を
あひよしうしろかれにひもひやあり
又新院の御さかいはさいの御ありしかはさかりき

まいらせ乃女御乃御かたにもおほくまいりつゝ御ゆかし
らんの宿しやう乃御つれ御らんしさふらふ人々なみたにむせ
四月廿日あまりのことなれはおりしもきさいの宮にはし
めしおつるまなかへとおもふに心ゆるしもなかりしかは
あまたの女房達をよひあつめてきさいの宮のにはの御さし
れうらひかりかゝやきてみえ給へはせたまふ女房の
けりて見給ひおはしましけるにきさいのみやもこと〳〵く
わかきらへけふ梅のえたを人々にくはへてさくらの
色をかへけるそのゝちかれこれかきさけてもいかに
きやうふ乃すけさくはなみしかうまたいひし
かの山ふきのすけの

ちれはゝ乃けしき其うちにてもいと見えはゝ乃
其のりわかいはゆる人々あさ色に桜のにほひ乃にほひこ
あかくちいろいろに梅にほひにこたへのからの
むらさきうすいろいとさくらすみたるにやまふき
らんの色にはせんかうへ乃きよくまかへりてきい
あさみどりしたるはなの色も其ゆかり乃うすきを花そ
くれなゐにほふいろかしわかきにほひありて
柳乃しなかへん山ふきのさくらのあやにまみらせり皆
以上へいまつの女房にまいりてくたされ
其ふかりにほひしてみなかれのもとし権中納言

まいり給ふ此日そらのけしき雨いり給つり
にとらしありさまおほんほうきさもありて、まいの給
へいの心のきさふみともありてあしあんとく
し実然しまいりてくれとまおほんかたをお隆を
こそありて給はへまいりたまふせのきん所から
まいり給ふかえるけまへ兵つくしらるる盃かし
ありさまとりさくたり給へすまいの寺あまた
ざいへいのうへをうへのおもしはきまて
ほとるいほくきんまうてにほとりきみてさまた
さはへあんくくれとかんのまうらまいりけり

ありて山水の御ゆきのつくえのへにそへてさ給
物の音いたく筆の跡人のかくれもなくきて
らまうく海のあさきをしのびて昔ね給りた
ら給くみえうしくあれおもしろとみゆの事也
此海ありておほくのあそび御こゝろ御くらく小
くふありて手にておほりいささね井ね給う
しとあけて中々めでおほしませ給ひて声して
そうあんとむすおもしろくてゆかしいおほさ
給て前にもかんごてもとむる兵ありくま
けてかへんおのはとあまりかくさるゑく

取り入れたいふ代もとひとつあかしてかへ
ゑ衛のすけおきてかたに中納言の以のえはる
ありとりあかしくあつかひてはしたなく
まてかくまりと見給つかひてはべりけるき
相の上をはいのかりとあはすまうしてたる
給経(遠はば)にたゞふ番一三方めのみ子より
そしろまりさく衛かへて給等の世り
ふくつしめしとおほしきやうしておほし
ありさ衛門つりおほしめしもはせしたて衛
のやうまりんて取れさ衛おほせつかはしくいその

くれすくられわりし給つりかくかてにうれしの
ゆく所をに見ませさし衛がきれくらしさまの日記ではい
あかも衰のの尋ねてゆかしめあるたるたふとも
ゆかしまられもしくかと年おほさす左衛への
御返り常しおほせ見るをつかさて衰にお比て
しかし川にみなおもしゆりて思ひける
そりめりの取あけかくかくなる給ふ物して
何となりおほさかてゆかなるけるまたしかつ
ねてありものへ御物からうでいそきて侍
まけるたゞほどらくいしにこそとは思ひて

御しはこうしものちかまあそひやかりしに
もし院のゝくまなくおもしやはらかくて大将殿には左
まいらせしをもりて御ちかひにやあらん御ひめそら
三の宮のちゝゐとかくおほえ侍
大将殿もしきれたりしか御前にてかく令は
おほしはしもさはくにあはれはらはせ道をはし
くらひ程のことにおもひのかへるやうなさくの
物をかくもまことはしもにておはしますをいふなと
かゝなる大将とまことと御ゆの大臣
くまのこともおもてうけ給は大将殿へいる

ていゝゆくところまつみつへきにもあらく
御しをかたもあ山川にありて空方ならの
ゆきをおほゆかくれとふかひなく御事
つれなしうとき其のゆくゑありて御
いつとゆくそえんにふおもはれしをはかなく
ていのめてたき御子ゐすへきおはしましつ藤き
なほはかの大将やおもひと御子よりおへて
ねたうのなにとおもひをありたる御大将
またまるまとみなくまとのしあらまほし
なにかんいゝとのおなさあさていはれありとおもの

東京大学総合図書館

つくらせ給ふさんにあはせてつね人もゆるさるゝみちま
なくいはれことまでおよばせたまひしかれば見ん
ゆるされたるをもめでゆるされけれたゞ
まつそくおはれこの比の中には人におぼ
ゆる人の心にも御このゝえけるにそのてら
院の御手ならてみこゝろあいさんにすぐれ
侍まくゆうりくのさしきに御世は給ひけるを
ちか中にてゆうるとて今の御時入道殿
うけさせ給ひつゝもひありてまたきはさのゝみ
にそいこそすゝめ手の中にいきんひ世給

かゝるむかしの所々にて所業のいにしへ絶え
をばそのかむかしつ業くにつたへ給ふてお
はしの給を世業よ此人さまさりさきて世
すぢのゆるい我常の所かそまをはしおふ
あさ手ところに給へしかと御手にてまき
此ことごとき乃上をとふてかゝるを給くてゆつ
竜るいはりにて家しつもときゝりゝまと
うら竹きこうて給ふまへ為業にや院の
いま業にておろくまうしかゝるも月白
おほりの月さしいそて前くいまゝくゝる

おゝ禄と大とゝの御こゝろもおりしき程なりけり
御んのつき給はぬにより、そゝろに中納言
給ひりたまふ所は、とし人のゝ浦ゆかりとて身
もてまかりみこゝろのいにとまりとしひて
小ねの命婦つらつら人の御心を思くれし
とりとく思ひしたまはすいさゝかもしゆ
おけなるまちに花のなにも人のいのちなり
はゝのふみにて御られ給ふ程御きゝて
嵯峨のわりなくたいは中宮の心のまゝにらしら給
そすみんこいかばかりを又の禄を給ひりたまふそれは

のこゝふに御覧れさゝさきて東ふかき浦へおもむきに
中納言行平の在原のあてきさて在給ひ名れ筆
うけしうは又歌はりのまはれしゆかしかゝ世を
いゆつきしうし美にして在給ふ人中の心
ゆき給ひくおほしけりら哉されれは見ん
ふそまうを在すふけるみ歳年まつ有てて
くすらそのよすきさして給へい中納言いはれ
おはしおさ歳へ送もそのまゝおかれる人
ありし人の心をぞはいふかしくりあ年ごとに
されは給は須磨やりおほしゆかしき給はれ

人されども見てそれまつりごと給ひてなへて
しくなりてとおほされなるなみ人さまなる心
ことにて此のめでたうと本の人武といつくしく
鳥夫建ハ世を鳥りと都もしく海の
うち人の男形しておもふしてさしく入道は
世さ給ふくこと共なり世ありけく
そまされ給ふ見物に世をお知らくハ海なこ
しおも見えおりしまつ洪とも見えてまつりくなれ
世にもて夫なんと思くおほめし人なの昔の
鳥なしを見んきくおもよひさそれさくらね

たくみはり世にぬけめなる人の好くえてつて
鳥ぬわきなり也世にかみは猶都にまおきなり
中此の夫めなりとく共つこたりしくれ人になり
て侍まにてをみちの梅のなりハ海しらぬちの
仍人いふなれハのちうし給さうし貴りけりこ
とりわらくのち世の年をつとめつゐいよゝ給て
の思ひとおほしく山里の死とやうなりとて共て
ぞなうをなくて世給ふ仏経のゆくすゑをそへて
せさせ給ふ事なりすゑの露ならぬ事な海に
うしなきわかく見んとおほしめすふそ心く

まえ給ひ候ていさけ見侍りておほしき
はかなりつる事にはなりけり

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館